

哀を玄らすば、其心頑然として、鬼畜木石のごとく、痛さ痒さも玄らずなりなん、何をもて自愛しなにをもて恭敬せん、義を聞いて感する事なく、不義を聞いても恥る事なかるべし、是をもていふに、仁義禮智いづれも心の徳にして、各其理わかるれども、其本源は仁に外ならず、人として不仁なれば、義も禮も智も其さまあり、其用ありといへど、所詮内より生せねば、眞の徳にあらず、公の理にあらず、この故に仁に心の徳といふて、外に徳をいはず、仁に愛の理といふて、外に理をいはず、そのいはざる所に、ふかき意ありと玄るべし、

〔伊勢平藏家訓〕五常の事

一仁といふは、人をはじめとして、生あるものをあはれみ、おもひやりふかくいたはる根情を仁といふなり、仁は慈悲の事と心得べし、父母に孝行するを初として、萬物此仁をはなれてはならぬ事なり、

〔文會雜記 上〕一仁者心之徳、愛之理ト云ヤウナルコトヲ、徂徠モ仁齋モ、トヤカク云テ、ハリアビセリ合セラルレドモ、何ノ用モナキコトナルベシ、神祖家康川ノ御遺訓ニ下ヲ治ハ慈悲ト云一言ニテ、安民ノ道モ叶ベシ、然レバ經術ト云テ、メツタニ骨折モ、隙ニマカセテ云フコトナルベシト、君修ノ論ナリ、

仁例

〔古事記 上〕爾速須佐之男命白于天照大御神、我心清明故、我所生之子得手弱女、因此言者、自我勝云而於勝佐備此二字以音離天照大御神之營田之阿此二字以音埋其溝、亦其於聞看大嘗之殿屎麻理此二字以音散、故雖然爲天照大御神者、登賀米受而告、如屎醉而吐散、登許曾此三字以音我那勢之命爲如此、又離田之阿埋溝者地矣、阿多良斯登許曾自阿以下七字以音我那勢命爲如此、登此一字詔雖直、猶其惡態不止而轉、

略○下

〔日本書紀一代〕一書曰、○中夫大己貴命與少彥名命戮力一心經營天下、復爲顯見蒼生及畜產、則定